

都連正常化への道



会長代理 酒井 繁

東京都スキー連盟の1995年シーズン行事の幕開けは残念ながら、昨年末以来燃り続けて来た菅平における準指導員検定会の際、検定に携わった数人の幹部による「点数の改ざん」がなされたという、関係者のリークによるマスコミ報道で始まったような気がします。

時あたかも理事の改選期でもあったことから、様々な憶測が乱れとび疑心暗鬼の中、監督官庁から改善せねばならない幾つかの問題が指摘されたのでした。

折しも、10月2日に役員候補者選考委員会が適格者と看做した20名の立候補者が理事として推薦され、評議員会の承認を得て「都連正常化に向けて」新執行部が発足し、玉川大学教員の酒井繁が理事による互選で臨時会長代理として選出され、評議員会もこれを諒承したのでした。ところが、都連の混迷はこの頃から既に始まっていたのかも知れません。

11月19日の継続評議員会で突如として一部の評議員らから「今回選出された20名の理事は、監督官庁が改善を求めている役員選考委員会によって選ばれ、しかも南関東ブロック協議会や、その意向を受けての全日本スキー連盟への対応に不適切な点がある。」として、不信任案が提出されたのです。評議員会が選んでおいて、それを認めないという奇妙な発言に、当然の如く執行部は反駁を激論が戦わされました。ところが、採決に移るわずか10分間の休憩の間に「不信任」が「総辞職勧告」に変更され、一部の評議員によって動議がなされ、30対26と言う票差で執行部退陣の要求に切り替えられるという筋の通らない、全く腑に落ちない動議が強行されたのでした。結果として、可能な限り早い時期に、加盟団体の総意に基づく執行部を発足させようということになり、1

月21日に評議員会を召集し、31名の立候補者の選挙を公示したのでした。

ここで、規約解釈上の見解の相違や立候補に伴う評議員の辞退などの理由で、18名もの方々が評議員を辞任され、寄付行為にある70名～90名の評議員の定数割れを生じてしまったのです。

ここでも又、都連始まって以来恐らく経験したことのない「定数割れによる評議員会開催中止」という措置が酒井会長代理の権限で評議員会に通知されたのです。法の解釈は一律には行かず「定数」をめぐる、執行部と一部の評議員との間で激しく議論が交され都連の混迷は愈々深くなって行つたのです。双方が加盟団体に送付した文書で、一般会員はその理解に苦しまれたことでしょう。そうこうする経緯に中で今度は3月7日に一部の評議員の呼びかけで、執行部も選挙管理委員も出席しないまま強引に「継続評議員会」を開催し、最低有効得票数も決めないまま「理事選挙」を行つたのです。31名の立候補者のうち全く得票数のなかった1名を落選とし、残りは得票が1票であっても30名の枠内に納めて当選としたのです。

全く良識ある団体の評議員の行動とは思えぬ珍奇な決定がなされ、都連の混乱はますます深まり、当然の如く「理事就任拒否」をする当選者が相当数現われて、新しく目論んだ理事会も定数を割ってしまうと言う極めて不名誉な現実を生んでしまったのです。この違法行為を是正し「都連正常化のため」に酒井会長代理の呼びかけに応じて、4月23日に代表委員会が開催され多数の方々の意見があり、方向の一致を見ました。「都連正常化への道」は1994年10月2日に選出され承認を受け、今日まで実質的に都連の各種行事を執行してきた。所謂、酒井執行部によ

って実行することの確認されました。即ち

- ①都連を正常運営して行くために、酒井執行部か田執行部のいずれかを認知することではなく、「全く新しい執行部」を作る。
- ②全く新しい執行部を選出するために、現在定数割れの評議員数を当初の定数にする。
- ③平成5年9月当初の評議員数90名、平成7年4月現在60名なので、30名の補充選出を行う。
- ④評議員が定数された時点に於いて、役員(理事・監事)選出を行う。
- ⑤5月20日に選出された評議員の任期は、平成7年8月末迄の残任期間とする。

⑥立候補者の推薦受付選挙業務は、役員・評議員選出管理委員会に委ねる。

以上の項目に示されたことを「全く新しい執行部」を選出するための確認事項として、5月20日に代表委員会の圧倒的多数の賛同を得て、30名の欠員評議員を選出し愈々、「都連正常化のための」役員選出が来る6月18日に「平成7年度第2回評議員会」で選出する運びになったのです。

まだまだ、昨今の情勢から楽観は許されませんが、一日も早く、都連に加盟する全ての会員のための都連作りこそ、急務であると感じています。ご協力を願います。

総務本部報告

本部長 久保田 友江

10月2日、1ヵ月遅れで20人の理事が決まった。この現執行部は「従来の評議員の手によって選挙システムによって選出」された理事ではなく、「役員候補者選考委員会」という小組織が選出し、評議員によって承認という形で誕生したのである。この選出方法こそ後々迄禍根として残る問題であった。上記委員会は去年4月に承認された新運営規則の一つであり、始めて運営されたものである。しかし、一部委員会の人々だけの選考方法には公平性が欠けていることや、都教育庁の指導もあって、11月19日の評議員会でこの委員会規則は、抹消と決議された。

かようないきさつで出発した現執行部は、シーズンインを前に各部とも事業運営の活動体制に入った。渉外全てに関係する当総務本部は、教育本部と共にまずは「準指検定一部受験生の再考査」に係る仕事で、全日本と再三再四に渡る交渉が続いた。この件は全日本の寛大なるご指導と受験生の協力によって無事終了した。

3月一集団によって発起され、一部の評議員達による評議員会開催一理事選出一登記手続完了。アレヨアレヨと言う間に田氏等が「我こそ執行部」と名のりをあげ、加盟団体各協賛会社等への通達を出した。驚いたのは登記抹消されてしまった我々現執行部ばかりではなく、みなみな様であろう。度重なる文書の発送。発信人である田氏名前上の押印は(財)東京都スキー連盟の実印ではなく、改印された印が押印されるに至っては「どっちが本当の執行部？」と悩まざるを得なかったであろう。さらに田執行部は、

皆様の財産である「都連の銀行取引実印」をも「印鑑紛失」と虚偽の届と共に「改印」をしてしまった。上記の件については「事実関係及び証拠文書」を4月23日代表委員会で詳細を報告しご説明致しました。現執行部は翻弄される中でも、加盟団体の皆様を第一義に考えました。シーズン真っ最中、各部の行事が毎週毎週連続して進行、どの行事もおそろかにできません。例年以上により綿密により正確に企画しました。何のトラブルもなくどの行事も無事成功裡に実施出来たことは加盟団体各位のご理解とご協力の賜と感謝しています。

以上経緯報告の概略であるが次にいくつかの項目を報告。

- 雪上行事の合間をぬって開いた理事会は緊急会議も含め20回、過去に例をみない多忙であった。
- 臨時評議委員会、代表委員会開催
- 名簿刊行を行った。
- 都連60周年を来年迎えるにあたり、昨年末より「記念誌発行準備会」を発足、諸分担を決め研究中である。これは次年度へ引き継がれる重要な仕事の一つである。
- 前述の如く去年4月に承認された寄付行為に基づく運営規則を今一度根本的に見直す必要がある。スキー連盟という性格上加盟団体を重視しての財団法人の組織運営再検討ということである。
- 平成8年度の予算編成の準備段階に入っています。事業案、予算案審議と決議は次期執行部へ移行されていきます。

教育本部報告

行事をふりかえって……

本部長 増田千春

様々な問題を、抱えながらスタートした今シーズンであったが、各方面からの指導や専門委員の献身的な協力により無事終了する事が出来た。

27に及ぶ行事を3人の理事体制でまかなう忙しさが予想されたが、専門委員の部会制を採る事で行事運営の円滑化を計った。指導部-研修会・クリニック関係 技術部-技術選手権・専門委員強化 検定部-準指検定・テクニカル等検定 の3部門を置きこれを本部会が調整する方法で、シーズン中毎週行なわれる行事に対して各部会が、行事の一週間前には在京で打合せを済ませる事で現場でのスムーズな対応を狙った。行事の中で専門委員が出来るだけ動き安い状況を作る事で本来持っているスキーにおける専門性を引き出す事が出来たと思う。

指導部 年末に行う千人近い人数で同時期にふたつの会場を設ける事は運営上、内容的にも無理があり今後の課題であると考えている。新教程の理解がテーマとなったが、シンプルな技術の組立ての概要は理解されたと思う。4月の熊の湯研修会では“高齢者に対する指導”の特別講演(平澤文雄氏)を持ち、高齢者に対する指導研修のスタートとし、今後実技指導につなげていけたらと考えている。また同様にジュニアに対しても研修会で取り扱い、クラブ行事の正月・春休みの活動に役立てて戴ければと計画している。

クリニックでは、初めてVTRによる研修を試みた。滑りの観点について繰返し観る事や、話し合いによる技能評価から幅広い指導法が考える事が利点となる。内容的にはさらに充実したものを考えていきたい。

検定部 準指検定会は理論・実技とも全日本立合の下で実施した。教程・教本が改定された直後であったが、理論の学習時間が非常に少ない中では理解度が高かった。実技では指導に必要な技術

と実戦での技術のバランスが悪い事や、設定された種目の基礎になる技術が理解されていない事が目に付いた。今回はコンピュータ導入と検定員全員による判定会議を初めて取り入れた。CPとジャッチ結果の厳正な確認が出来た事と受験者一人ひとりの結果分析に至るまでの時間がとれた事が今回の運営側の成果と思う。全日本に準じた検定方法を採用した為、ゼッケンの男女別年齢のランダムな配付、結果内容(点数)の非公開等があった。3会場2会期で行われたが、検定会としての内容的な基盤が整ってきた事を考えると同一会場2会期の合理性を検討していきたい。

指導者養成では検定種目にこだわらず種目を構成する技術要素を学ぶ事で指導技術の幅を身につけてほしい。

技術部 都技術選手権では8名のデモが全日本行事の為不参加となった。“勝てる選手を選ぶ”をテーマとして2日間で予選・決勝の選手権を行い、その後、選考会で全日本出場者を選考する方法を採用した。また選手権の合宿においても“選手に良い環境を”のテーマをコーチが徹底出来た事により良いコンディションで大会に臨めた結果2位7位(2人)10位の好成績を収める事が出来た。他県連に比べると強化日程がほとんど無い事も考慮し専門委員の強化と合わせて全体的なレベルを向上させていく計画が必要と考える。

今シーズンの行事において、2千人を超える方々にアンケートを配付し各行事におけるご意見を戴いた。

マンモス化する都連の全ての行事について限界を感じており、各部会と検討して可能なものから改良実施していきたいと考えている。

諸問題が山積した中で無事日程を終了出来た事を、加盟団体会員、行事会場関係者、に深く感謝する次第である。

競技本部報告

'94~'95シーズンを振り返って

本部長 小倉信夫

競技本部の一シーズンを振り返るに当って、私ごとときが本部長として業務運営を行わなければならなかったということが、長いSATの歴史の中でいかに異常な事態であったか……ということをご賢察いただきたいと思います。

このような状況下、今シーズンからスタートさせた新規行事も含め、恙無く所定の行事を遂行できたことは専門委員諸兄の献身的な努力と地元スキー場ならびに協賛団体の関係各位のご協力の賜物と深く感謝いたします。

さて、限られた紙面上で競技本部の全ての行事について記すことはできませんので、今シーズンからの新規行事と私にとって特に印象の深かった国体についてご報告したいと思います。

1. 新規行事

(1) 専門委員雪上研修会

12月9日~11日、北海道朝里川スキー場、金曜日夜、羽田を発ち、実質土曜・日曜二日間の研修を行った。積雪、天候にも恵まれ、シーズン当初にコースセット、計時計測(SEIKO-CT300)等の雪上研修が実施でき、大変有意義であった。

(2) ランキング記録会

第一回：1月16日、第二回：2月12日、第三回：2月26日、いずれもファースト石打スキー場上越方面の雪不足により、一旦は中止も止むを得ない

かと思われた第一回目が、蓋を開けてみれば記録的な大雪に見舞われ、レース、往復の交通とも大変なこととなったが、第二回、第三回は天候に恵まれ順調なレース運営ができた。

各回とも定員の250名に近い参加者を集め、無ポイント者層の競技熱の高さを物語っている。

参加各選手のSATポイントは現在ポイント委員会にて集約中であるが、8月末頃アルマナック記録編にて発表の予定である。

また、本記録会の開始により、従来異常な申込み状況となっていたミズノ杯、MIXカップ等がポイント制限となり、申込み時の問題が解消された。

(3) 歩くスキー

3月11日~12日、妙高パインバレースキー場 事前のPR不足等もあり、参加者は50名程度と少数ではあったが素晴らしいコースと地元の多大な協力により、第一歩を踏み出すことができた。

全国的なXCスキーへの関心の高まりを考えると、この一歩を将来へ継いでいくことが大切と思う。関係者への地道なPRにより、今後、大きく発展していくことを期待する。

2. 第50回猪苗代国体

「友よ、ほんとうの空へ飛べ!」のスローガンの下、福島県猪苗代町を主会場に国体スキー競技会が開催され、東京都チームは天皇杯(男女総合)

95技術選 (トップ10のテクニック)
 ●第32回全日本スキー技術選手権大会
 税込価格3,200円(カラー10分・毛脚
 ●準決、決勝全種目トップ10と男女総合10位
 ●第15回インタースキー野沢温泉大会)
最新日本の技術、世界の技術
 ●4年に一度、全国最新のスキー技術を披露
 税込価格2,200円(カラー30分・毛脚
95フリースタイル
 ●フリースタイル(カラー45分・毛脚
 ●モダリティを中心に、爽快華麗な演技を収録
 税込価格1,980円(カラー45分・毛脚
94 ●96のデモファイル
 ●第24回全日本デモンストラート選手権会
 税込価格3,500円(カラー10分・毛脚
 ●新たなデモ認定者男女37名の技術と個性
スキー王国の上達マニュアル
 ●VTR版・新オーソリアスキー教程1
 ●2本組税込価格5,200円(カラー各30分・毛脚
 ●オーソリアの卓越したスキー技術を解説

95スキー図書・新刊
日本スキー指導教本
 ●全面改訂版(全日本スキー連盟編著
 ●B5変・オールカラー・定価2,600円・送料340
 ●新しい技術体系、スキー理論を展開し解説
 ●指導體系、指導理論を新たに整備し解説
 ●B5変・定価1,600円・送料340

スキージャーナルの
 ★好評発売中! (定価は税込)
 日本スキー連盟編著
 全日本スキー連盟編著
 全日本スキー連盟編著



〒160 東京都新宿区四谷4-24 第5石橋ビル スキージャーナル(株) ☎03(3353)3051 郵便振替・00100-1-33504

フリースタイルスキー部報告

部長 三 浦 肇

7位、皇后杯（女子総合）7位と雪有県に互して健闘、両杯とも入賞した。

アルペン陣では1・2フィニッシュならぬ2・3フィニッシュを実現してくれた池田、佐伯の両選手。上位入賞を果たした男子の推薦選手、佐藤、五藤の両君。期待どおり入賞、貴重なポイントをあげてくれた男・女二部の皆川、中島両選手等の活躍が目立ったが、特筆すべきは男子C組、森選手の優勝であろう。一般社会人レーサーとして頑張っている森選手の全国大会優勝はSAT所属の多くの社会人レーサーに大きな励みと刺激を与えてくれると思う。

競技本部としても、今後、選手強化の方針を社会人へシフトしていく必要性を強く感じている。

ノルディック陣では、クロスカントリーの同和工業勢の活躍が際立ったが、成績は抜きにして本番で初めての70m級ジャンプに挑んだ少年コンバインドの岩井選手の健闘に拍手を贈りたい。

また、最終日のリレー競技において我が東京チームはとんでもなく大きな見せ場を創ってくれた。

長野、北海道、山形、新潟等の錚々たるチームを押し、一時はトップに立つ快挙を演じてくれたのだ。惜しくもアンカーで長野の佐々木選手に抜かれはしたものの、二位の成績は本当に立派だった。

私達もコース中に散り、声がガラガラになるまで応援したが選手と一緒に身も心も熱くなる想いがした。

このように幾多の感動を覚えながらシーズンを過ぎてきましたが、この間にもSATの組織をめぐって様々なトラブルが生じていたようです。素晴らしい感動を与えてくれるスポーツの世界に、政治的な駆け引きや権力争いは不要です。来シーズンの正常化されたSATの姿に期待しつつ、結びとします。

今シーズン雪上で予定されていた行事は、地元スキー場ならびにスキー連盟をはじめ、都専門委員の絶大なる協力によって、いづれも成功裡に終了することができたことに心より感謝したい。

リレハメルでのオリンピック以来、とくにモーグル種目に対するスキーヤーの熱気は高まるばかりだ。3月に開催されたダイワ杯モーグル競技会では、申し込み人数が300余名にも達する盛況ぶり、大会運営に関する問題点への対応について、いくつか今後課題を残す結果となった。安全かつ公平な大会運営のためにも、来たるべきシーズンには新たに独自のポイント制度を導入し、全日本のA級公認大会への選手の出場に対応していく予定である。

また、都所属の強化選手の活躍も著しいが、年2回行っている体力測定や栄養指導などの成果が、少しずつ結果に表れてきたものと考えられる。なお一層の底辺拡大と共に、心技体の充実した選手の育成にも積極的に取り組んでいきたいと思う。全日本選手権大会に出場し、入賞した都連所属選手の活躍ぶりは次のとおりである。

第15回全日本選手権大会入賞者（都連関係）

〈バレー〉 男子 1位 長谷川宏太郎（港区MFF）3位 生沼英幸（港区MFF）7位 谷合勘弥（フリーSC）女子 1位 田中由香子（港区MFF）5位 松島安以子（フリーSC）8位 柳直江（スカーゼFSSC）

〈モーグル〉 女子 5位 堀江寿美代（チームリステル）

〈エアリアル〉 男子 1位 石川康太（チームリステル）4位 山口茂樹（スカーゼFSSC）6位 丸本健（スカーゼFSSC）7位 安藤和明（ダイワ精工）8位 米澤直樹（ダイワ精工）女子 3位 宮澤佐知子（スカーゼFSSC）

今年も積雪に恵まれ、スキーを充分楽しむことが、出来たと思います。

平成6年度 各加盟団体行事で発生した事故報告の集計が出来ている。この集計によると、事故の発生件数は減少傾向にあると言えます。しかし内容的には、初級者より技術レベルが高く、経験も豊かな中・上級がしめる割合が大きく、70%にもおよんでいる。年齢別に見ると20才台～30才台が65%をしめている。用具や服装の改善が進んでいるものの、安全対策意識について、向上を計って行く必要があると痛感しています。

最近のスキー技術がスピードアップされることにより事故の内容が大きくなりやすくなっています。北海道で発生した事故について、判例が出ま

した。これは、上方に居るスキーヤーがコースの選択権があり、下方のスキーヤーに対する責任を負うことが明確化され、事故に対する責任も負うことになり、金銭的請求をされることになる。交通事故と同様に自衛して行く必要があります。

事故は、自分自身が意識し注意し、ルールを守ることにより、大巾に減らすことが出来ると思います。楽しいスキーを進めるためにも、安全対策意識の向上に努めて行きたいと思います。

最近の問題として、それぞれ特性の違うスキーとスノーボードが、一つのスキー場を利用することによる事故が発生しており、それぞれのルールの統一的なルール作りが急がれております。

● デフ・スキーヤーとともに

…… 準指合格への道のりと今後の課題 ……

座談会

平成7年度の準指検定で3名の聴覚障害者（以下デフと記述）の合格者をみる事ができました。このことは、デフ関係者の喜びはもとより、都連スキーの「障害者・中高年スキーヤー・子どもとともに」といった今後の新しい方向を考える上で重要な意味をもつものでした。

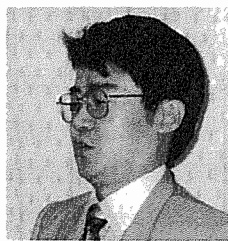
デフ・スキーヤーの準指合格への道のりをたどり、今後の都連のスキーの方向性を考える目的で、平成7年5月14日(日)、東京四ツ谷のスクワール麴町で今年合格したデフ・準指スキーヤーを囲み座談会を持つことが出来ました。その模様をお伝えします。

当日の出席者は、デフ関係者として、土師比佐夫氏(準指)、藤井浩二氏(準指)、澤田桂子氏(準指)、栗野達人氏(デフ・会長)、福田弘子氏(デフ・事務担、通訳)、峯岸愛子氏(通訳)の6名が、都連関係者として、酒井繁(副会長)、前田利夫(教育本部副部長)、藤原正光(総務部理事)、本間毅一(総務専門委員)の5氏であり、座談会は酒井副会長のご挨拶の後、藤原の司会のもとに進められました。

スキーとの出会いはさまざま
継続には良き友がそして理解者が

— 司会 — スキーを始めたきっかけと楽しかった思い出をおきかせ下さい。

土師 — 小学校5年の時スキー教室でスキーに出会い、1級を取ったのは今から17



栗野 達人氏

～8年前です。難聴者もスキーができることに感銘を受けました。その時先生から指導者になるように言われましたが、自分のハンディとか指導者になっても「誰に教えたなら、教える場所は」といったことで随分悩みました。それから何年かスキーから離れていましたが、2年前にスキーをするチャンスに巡り会い、準指を目指しました。

藤井 — 秋田出身です。子どもの頃父がスキーを買ってくれまして、それから冬になるといつも日が暮れるまで滑っていました。高校時代は田沢湖スキー場で、上京後は土・日に友だちと越後湯沢

で滑っていました。死ぬまでスキーを続けたい。シーズンオフには「阿波踊り」で体を鍛えています。

前田(理事) — どうりで、急斜面の素晴らしい滑りは子どもの頃からのものですか。



土師 比佐夫氏

澤田 — スキーを始めたのは21年前、高校時代だったと思います。25歳の時1級を、28歳の時準指を初めて受験しましたが失敗しました。健聴者とのコミュニケーションが大変でした。講師の先生の言うことが理解できずとても辛かった思い出があります。でも、栗野さん(デフ・会長)と出会い再び準指への挑戦が始まりました。

土師 — 準指を受験している時には楽しい思い出はなかったと思います。講習会を受けたり辛い練習の毎日で、緊張の連続でした。でも、講習会や練習後の友だちとの語らいはとても楽しかった。

前田(理事) — 準指のための研修会や検定試験で、皆さんが感じた緊張感を次に続く方々に伝えて行ってください。そして、緊張しないためにはどうしたら良いのかを教えてやってください。

楽しい思い出は、先輩やみんなと一緒にスキーができたこと、励まされたこと

一司会 — 準指合格に向けて、本当にたくさんのご努力と時には辛い経験をしてきたのですね。もう一度、楽しかった思い出をおきかせ下さい。



藤井 浩二氏

藤井 — 準指に合格し、妻や仲間が喜んでくれたことがとても嬉しかった。これからは障害者だからといって甘えないで、みんなと同等にやって行きたいと思います。

澤田 — 先輩達と一緒に板橋区のクラブでスキーができたのが楽しかった。みんなからの励ましがとても嬉しかった。

酒井(副会長) — 私も44年前新潟の田舎から出てきました。方言のためか、しゃべるとみんなに笑われました。でも、スキーのおかげでいろいろな

人と知り合うことができ幸せでした。

デフ・クラブの創設も健常者の理解と協力の中で

一司会 — 会長さんに伺います。デフ・スキークラブを創るにあたり、ご苦労なされたことや楽しかったことをお聞かせ下さい。

栗野(デフ・会長) —

5、6年前から都連に加盟するための準備運動を始めました。当初はなかなか理解してもらえず、果して健常者と同じようにクラブの創設や運営ができるのか不安でした。しかし、昨年板橋区スキー協会のご紹介で都連に加盟することができ、クラブ員一同大いに喜び合いました。そして、今年3

人の準指導員の誕生はこの上のない喜びです。デフでも努力すれば望みが叶えられるのだということがわかって嬉しかった。周りの方々の励ま



しとご親切で今までやってこれました。大変ありがたいことです。少し不安はありますが、みんなで頑張っていきたいと思います。

土師 — 準指を受けるにあたり、われわれのクラブには指導者はいませんでした。しかし、理解して下さる方々からさまざまなご指導をいただき大変嬉しかった。

酒井 — 私も元気そうに見えますが、3年前に心筋梗塞を患い障害者になってしまいました。今、富山のデモであった高村さんや国体選手であった四戸さんたちと脊椎障害者の方々のチェアー・スキーのお手伝いをしています。これからは障害者だけでスキーをするのではなく、健常者と共にスキーを楽しむようになって行くと思います。

一司会 — これで公式の座談会は終了したいと思います。緊張の連続であった気がいたします。会食しながらリラックスしてデフ・スキーの今後を話し合しましょう。

……会食中の対話から……

スキーのできる手話通訳者を コンパクトな講習会の班編成を

前田(理事) — 今回のデフの準指検定にあたり、福田さん(通訳)の功績は本当に大きかった。教育本部も感謝しています。

福田 — 講習会や研修会では他の受験生の方々がいろいろと助けて下さり、とても感謝しています。娘にもですが。

藤井 — スキーの専門用語は、まだ十分に手話に翻訳されていません。講習会の時、「ターンの時の力の入れ方(加重、加圧、回旋などの用語)」などの説明がよくわからない。

土師 — 講習会や研修会の時、健常者と同じ班だと講師の説明が良く理解できないことが多い。班の受講生が多い場合は特にそうです。都連から通訳を派遣するといったことは可能ですか。全国的にもスキーのできる通訳を探してほしい。

前田(理事) — クラブの中に通訳の方を入れていく方が意志の疎通がはかれて良いのでは。都連でもこれから若い専門員に手話を学んでもらいたいと思いますが、僕はもう無理だな。歳をとりすぎちゃった。(一同大笑い)

前田(理事) — それから、講習会の班編成は今よりコンパクトなものにしたいと思う。デフの方々だけの班編成には疑問を持っています。大切なのは健常者を含めいろいろな人とスキーを通して出会うことだと思います。

全国のデフを集めて、都連での 指導員研修会開催の可能性は

栗野(デフ・会長) —

デフの指導者は全国で10人程度います。澤田さんは女性の第1号ですが、全国のデフスキーヤーのために、都連で指導員研修会を開催することができますか。



澤田 桂子 氏

前田(理事) — 都連の指導員研修会に全国のデフを受け入れ研修会を開くことは可能です。しかし、それぞれが所属している都連の許可を得る必要があります。

栗野(デフ・会長) — デフ・クラブで独自のバジテストを行いたいのですが、B級検定員がいません。また、チューンアップの講習会などはどのようにしたら良いでしょうか。

前田(理事) — 都連からB級検定員を派遣する用意があります。チューンアップはスキー用品の会社が無料で講師を派遣してくれるはずですが。

藤井 — 今後、基礎スキー選手権に出場したいと思いますが、どうでしょうか。



前田(理事) — 大いに歓迎します。頑張ってください。

冬季パラリンピックへの参加の可能性は 他の障害者との連携も大切なのは

栗野(デフ・会長) — 長野の冬季オリンピックの後、パラリンピックが開催されると聞いていますが、デフも参加できるのでしょうか。

酒井(副会長) — 冬季パラリンピックについての情報は正確にはつかんでいません。デフとチェアスキー(肢体不自由者のスキー)が情報を交換して、お互いに障害者のスキーを発展させて行くことは大変良いことだと思います。

前田(理事) — デフは健常者と同じ扱いになっているのではないかな。パラリンピックへの参加は難しいのでは。いずれにしても全日本に確認してみます。

— 司会 — 準指合格までのご苦労や楽しみ、また、デフ・スキーヤーの今後の発展の方向といった、さまざまな意見ができました。大切なことは、健常者は障害を抱えている皆さまと共にスキーを楽しみ、情報を交換し、励まし合いながら友だちとしての輪を広げて行くことだと思います。長時間にわたり、ありがとうございました。

クラブ対抗競技会報告

世田谷区スキー協会、堂々の総合優勝

東京新聞・東京中日スポーツ杯 第48回東京都スキー連盟クラブ対抗競技会が、3月3日(金)から5日(日)にかけて菅平高原で、アルペン競技(表太郎ゲレンデ)、距離競技(自然館コース)それぞれについて行われた。参加者は、アルペン(739名)、距離(76名)計815名であり、大盛況のうちに終わることができた。結果は次の通りです。

第48回SATクラブ対抗競技会得点一覧表

1995.3.5

総合順位			アルペン			クロスカントリー		
順位	クラブ名	点数	順位	クラブ名	点数	順位	クラブ名	点数
1	世田谷区	59	1	港区	33	1	世田谷区	39
2	港区	48	2	ヌプリ	27	2	NEC府中	23
3	ヌプリ	27	3	チームフォン	22	3	江東区	18
4	NEC府中	25	4	世田谷区	20	4	港区	15
5	スポーツマン	24	5	ティンバーライン	17	5	JR大井	14
6	チームフォン	22	6	NTT東京	16	6	KSC	13
7	ティンバーライン	18	7	スポーツマン	16	7	都庁	11
8	江東区	18	8	スラローム	15	8	スポーツマン	8
9	NTT東京	16	9	北区	14	9	渋谷区役所	8
10	スラローム	15	10	スキー研	14	10	ヴェスタ	6
11	都庁	14	11	UNO	12	11	チロル	6
"	北区	14	12	東京ガス	11	12	新宿SC	5
"	スキー研	14	"	特別区	11	13	シール	4
"	JR大井	14	14	青梅市	10	14	大田区役所	1
15	KSC	13	"	ウェーデルン	10	"	東京ガス	1
16	UNO	12	"	モンタナ	10	"	ティンバーライン	1
"	東京ガス	12	17	東大和市	8			
18	ヴェスタ	11	"	杉並区	8			
"	特別区	11	"	調布市	8			
20	新宿SC	10	20	ヴィトラ	7			
"	青梅市	10	"	トルベ	7			
"	ウェーデルン	10	"	若葉	7			
"	モンタナ	10	"	エーデル	7			
"	チロル	10						

海外スキーツアー、
私たちにご相談ください。03(3203)9630

- 地球を滑ろうSNOW WORLDヨーロッパ・カナダ・アメリカ・ニュージーランド方面
- 南太平洋の島々へBEACH WORLDニューカレドニア・タヒチ・フィジー・ブーケット方面
- どんな旅でも03(3203)1213まで個人から団体・出張から社内旅行などご用命下さい。

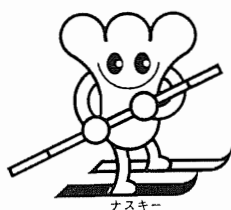
社団法人日本旅行業協会正会員 運輸大臣登録一般旅行業第351号・一般旅行業取扱主任者橋本健

株式会社 **クロサワトラベルサービス**

〒169東京都新宿区大久保1-3-14 ワールドビジネスセンター新宿5階 FAX.03-3203-9633

インタースキー雑感

S A J 技術委員長・S A T 教育本部長 増田千春



阪神大震災で開催が危ぶまれた第15回インタースキー野沢温泉大会が、自粛ムードの中で行われた。35ヶ国約1700人が集った大会は、日本のスキーマーケットに対する関心の高さを伺わせた。この大会の発祥の地であったサンアントンでの前回大会が、このインタースキーのひとつの総仕上げと言われた。世界の指導者がスキー技術や指導法の発表やスキーに関わる問題点を話し合う会議の場からこの大会がマーケティングやスキー発展のために何が出来るか？一般スキーヤーが参加しやすいイベントとは？…等の新たな課題が野沢温泉大会では求められていた。

長いスキーの歴史を持つ国、現在スキーが盛んな国、そしてこれから発展しようとする国、さまざまな国のスキー指導者が、それぞれの問題を持ち東洋の日本に集った。スキーリゾート開発が環境を壊している主張があれば、何とかスキーリゾートを開発しなくてはならない主張も一方には有る。またスキー客を多く持つ国がスキー教師を連れスキー場のある国へ出掛ける場合に生ずる、スキー教師の働く場所の諸問題とECの問題を抱えるヨーロッパの国々。そこでは国家資格と任意団体資格の問題の調整が必要となっている。

「世界市場の約4割を占めると言われる日本のスキーマーケットと、1770万人（93年）がスキー

をし、スキーヤーがスキーをする回数が一年間約6.5回、年間111,700円をかける日本のスキー環境を、世界のスキー教師がどう理解しただろうか？。スキー先進国と後進国のギャップが大きいスキー教師の集りの中では、共通の答えを見出す事は難しくなっている。

また技術や指導法に関する表現が少なくショーアップされたナショナルデモに対しても賛否が分かれるところである。音楽とスキーの楽しさを求めればどうしてもショー的になり、技術的な観点を丁寧に表現しようとすれば少し退屈なスキーをみせる事になろう。“技術はひとつ”とする“技術を整理する”時代は終りそれぞれの国の持つ事情に合せた“スキー技術”を発表する場に変化していくような気がする。

完璧な設備の中でスムーズな運営が行なわれたインタースキー野沢温泉大会であるが、前回サンアントンから引き続き抱えてきた問題を解決出来ぬまま、次回ノルウェーのバイトシュトーレンへ引き継がれるような感じが残る。スキー指導者たちだけが“スキーを考える”時代からスキーに関わる全ての人をとりまきスキーを考えなければならぬ時代に入っているのかも知れない。

世界のスキー教師がさまざまなスキー環境の中で諸問題を抱えている。年間300人近くの指導員が増え続ける都連の現状も、その研修や指導活動には問題が山積している。そしてスキー場が身近かとなっている都会のスキー教師が、スキーの楽しさをどう伝えていくかは今後大きな課題と言える。



第15回インタースキー観戦記

国際委員長 齋藤 久 理事・国際委員 藤原正光

今回の大会スローガンの一つに「湯の郷で スキーが結ぶ 心と心」があり、野沢温泉村の人々の暖かい心遣いがまさに温泉のようにいたる所で湧き出していることが感じられた。これは、大会2日目にインタビューした外国人参加者すべてに共通した「大会の運営も、出会った日本人もすべてワンダフル。どうぞお先に……、どういたしまして、の言葉がとても好きです……。」の感想からも裏打ちできるものでした。

スキーの印象について述べてみよう。まず最初は、音楽とスキーの調和や融合がこれまでの私たちの指導



に欠けていたのではないかとということです。

インタースキーのこれまでの主な目的は、それぞれの国がスキー技術を精一杯表現することにより、より高い技術と安全性の指導を追求することにあつたと考えられますが、今大会の「世界のスキーの新たな一歩」は、「より楽しさを求めながら、技術の向上を……」といった点にあるように感じられた。その具体的な現れが、音楽のリズムとスキーの調和であり、スキーとスノーボードとの競演であつたと思われま

す。大会2日目のデモンストレーションで、カナダ、アメリカ、オーストリアの各チームは、スノーボードを前面におし立てスキーとの調和を見事に表現していた。また、多分オーストリアであつたと思うが、「野沢温泉音頭」に合わせたデモンストレーションを行っていた。思わず、都連がよく利用しているゲレンデの「菅平音頭」はどうかなと考えてしまった。

大会中行った外国人の観客へのインタビューか

ら日本と他の国々とのスキー技術の違いについて多少述べてみよう。

「日本は初めてだけど、前の3回の大会（サンアントン、バンフ、セクステン）に参加しているの。



大会運営や野沢の人々をはじめ多くの人々の親密さに感動した。スキー技術については、オーストリアとほとんど同じ高いレベルにある。これは、日本の多くの指導者がわが国にきて学び、それを忠実に伝えているためでしょう。わが国と日本とのほんのわずかな違いは、滑るバーンの長さの違いかしら……」 リネ・グーリー、カリン・バンフ（オーストリア）

「日本とデンマークとの技術的な違いは、膝の使い方にあるといえるでしょう。日本の滑りは膝を意識的に上下させているが、わが国の滑りは意識させた上下動は使わず膝をターン方向に早く回転させている。その方が早く回転できると思うけどね。でも昨日のナショナルデモ見たでしょう。日本の滑りも素晴らしいよ……」 ハンク・ノグフ（ハンガリー）

専門的にはよくわからないが、このように日本のスキー技術はおおむね世界的なレベルに近づいているが、音楽との融和や調和・ボードとの共存・協調への積極的取り組みが今後の大きな課題となろう。そのことを通して、わが国も都連も「世界の新しいスキーの第一歩」への参加が始まるのではないだろうか。



スキー国体、天皇杯7位・皇后杯7位

競技本部理事・国体副団長 岩井昭雄

第50回国民体育大会、冬季大会スキー競技会が福島県猪苗代町で開催され、2月19日(日)1時30分から皇太子同妃両殿下のご臨席を仰ぎ猪苗代小学校で、開会式が盛大に挙行された。

東京都選手団は濱中春吉(都体協副会長)を団長として、本部役員10名、視察員3名、選手・監督52名合計65名で本大会に臨み、アルペン、クロスカントリー、コンパインド、ジャンプ競技にエントリーした。

競技は20日から始まり、まずアルペンで女子Aで池田和子(ロシニョール)2位、佐伯 幸(学連)が3位と順調なすべり出で、女子2部中島圭子(エーデル)が8位、男子Cで森輝行(日本IBM)が40番スタートながら、堂々の1位となり、ギャラリを沸かせてくれた。クロスカントリーでは男子Bで工藤博行(同和鉱業)が4位、男子Aで山崎正晴(同和鉱業)7位と初日で男女総合7位40点、女子総合6位24点と上位入賞を期待させてくれました。

2日目に入り、男子1Aで佐藤久也(デサント)4位、男子Bで五藤博文(スポーツファンクション)3位、男子2部で皆川元司(デイモンズ)8位とそれぞれ、得点を重さね、2日目終了時の成績で男女総合7位52点、女子総合7位24点(確定)の発表を見て、昨年並みの成績を収めたいと、3日目期待した次第です。

3日目クロスカントリー男子リレーに手の空いている者はもとより、宿舎の方々までも総出で応援に当たっていただき、全員必死の声援を贈って下さり、おかげで青年男子リレーが2位入賞を果たしてくれ、ダイナミックなクロスカントリーの応援も経験してきました。最終成績は、男女総合成績は7位59点を獲得することができました。男女総合成績は昨年より、6位から7位と順位は落した点が得点では15点上げた。得点を比較すると、昨年

はジャンプで15点と大量得点したが、今年はアルペンで平均した成績を上げている。今後の問題としては、国体に標準を向けた強化方法を抜本的に検討してはどうかと思う。都連としてはジュニアの強化は重点課題として近年継続して実施されているが、成人に対しての強化は充分とは言えない。

これからは強化合宿を(12月~2月)の間に、国体候補選手を指定し、日程も土曜・日曜を中心とした、成人が参加しやすい合宿を実施してほしいと思う。又、今年はずっとコンパインド少年組で岩井選手が出場したが、東京の選手は、なかなかジャンプの練習が出来ないのが現状です。彼のような若い芽に積極的に練習の機会を与えて伸ばしていきたいものです。

東京都では本大会の前に国体強化合宿を実施しているので日程が8~10日間と長く、選手・スタッフの健康管理には何かと悩ませられます。今回は本部宿舎のあるばいんロッジのご配慮により、宿泊スペース、食事内容においても充分満足いくものでした。尚オーナーの平山氏は日体大OBで国体においても輝やかな成績を残された方であり、合宿中のコースの確保、選手の送迎等何かとご心配いただきました。

最後に、以上の様に無事全日程が消化出来たのも、スタッフの皆さんの献身的な協力のおかげです。特に総務担当2名の専門委員には、一日中、目の回る忙しさに耐えてくれました。スタッフの皆様ご苦労様でした。



'95フリースタイルスキーをふりかえって

全日本代表選手・港区MFF 田中由香子

今年は2年に一度開催される世界選手権の年にあたり、12月当初のワールドカップから非常に盛り上がりつつあった。しかし、アルペンの世界選手権が雪不足のため中止されたことを御存知の方も多と思うが、フリースタイルの会場も同じく、北米、ヨーロッパともに雪不足で大会の延期、コース、日程の変更がたびたび起こり、選手にとってはコンディショニングがとて難しい大会が多かった。しかしそんな中でも日本チームの活躍はめざましく、世界でも注目される国となったことは喜ばしい限りであった。

ワールドカップに遠征する新日本チームは高校生、大学生を中心に平均年齢23歳と非常に若くなり、またモーグルチームは外人コーチのステファンを迎え雰囲気ガラリと変わった。そんな新しい体制でシーズンを迎えた。

11月半ばにアメリカでの合宿からスタートし、12月ヨーロッパでのワールドカップ初戦から参加、1月の北米戦、2月の世界選手権と休む間もなく試合が続く。一番気合いが入っていたのは世界選

手権、特に未だオリンピック種目になっていないバレー種目の選手にとってはその名のとおり世界一を決める大会となるので選手の目の色が変わるのは当然であろう。

世界選手権の舞台はフランスのラ・クルーズ。中世の面影を残す湖の街アネシーから車で約40分。日本チームはバレー4名、モーグル4名、エアリアル1名、計9名が参加した。斬新なオープニングセレモニーで幕をあげた大会だがただひとつ天候だけは味方してくれなかった。どしゃぶりの雨の中コンディションは最悪となり怪我人が続出した。そんな最悪の条件の中でもモーグルの里谷、三浦は予選を通過しそれぞれ12位、14位となった。都連所属のバレー田中、生沼とともに15位、長谷川20位、エアリアル安藤は33位であった。

各種目の優勝者は世界選手権初優勝という選手5人を占めた。特に地元フランス選手の活躍が目立ったのだが、地元のパワーをプレッシャーに感じることなく自分の味方につけてしまうその技術は外国人はとびぬけてうまい。技術的にはひけを



とらない日本チームは97年世界選手権、98年オリンピックと長野で開催される大きな大会に向け、この問題を克服するかにメダルがかかっていると云っても過言ではないだろう。しかし、生沼、田中以外の選手達は世界選手権初出場であったにもかかわらず雰囲気にもまれることなくそれぞれ良い経験となり、また自信を深めることができたのは、これから向け大きく一歩ふみ出したことは間違いない。

最後にバレエの現状であるが、3種目揃ってこそフリースタイルという精神を表わすため、それぞれの頭文字を染めぬいた「B A M」というアームバンドを選手達がはめて試合に出ている。日本国内大会では赤いリボンをつけ「長野でバレエを正式種目に」と運動を行っている。いまのところ正式種目にきまってはいるが、世界中の選手達の悲願「バレエを正式種目に」を実現させるため是非皆様の御協力をお願いする次第であります。



登録番号 No. 274

浅貝スキークラブ

会長 梅 沢 進

本クラブは、先代の岸野禎夫会長が、新潟県湯沢町の浅貝地区にスキー場をオープンした時にスキー学校（七五三木利夫校長）を開設するため、1970年に浅貝スキークラブを創設し、翌年の1971年にフロイデ・シー・グルッペの紹介でS A Tに加盟。

当時は、常設のスキー学校としてクラブを運営しておりましたが、その後は、スキー場の発展と共にスキー学校はプロのリーベルマン・スキースクール（梅嶺憲明校長）に移籍し当クラブは一般のスキークラブとして歩き始めました。1980年代には、リーベルマン・スキースクールに、レッスンを受けに来ていた人達、主に、高校生や大学生、

あるいは卒業して社会人となった人達が続々とクラブに入会をして活動も活発となり競技志向のクラブへ進展していきました。

梅嶺校長等の熱心な指導を頂き、レベルも向上して、S J野沢D H総合優勝を果たしたり、国体出場者も3名も出すほどとなりました。特に、女子選手の活躍が目立つクラブとして有名となったほどです。

現在、競技の練習は、浅貝スキー場（現：苗場国際スキー場浅貝ゲレンデ）と松枝岐スキー場で実施しています。基礎スキーの練習も行い準指導員も7名と増えてきました。又競技関係の有資格者（セッター、旗門員、T D等）も増え、これからもS A Tの発展に寄与すべくクラブ員一同努力する所存であります。

これまでのご支援を感謝いたしますと共に今後ともご指導、ご支援頂きますようお願い致します。



東京都スキー連盟公認スキー場

Shiga Sun Valley

志賀高原サンバレースキー場 TEL 0269-34-2255
法坂スキーリフト株式会社 FAX 0269-34-2616

ネーゲルスキークラブ

会長 西川 暢 芳

ネーゲル・スキークラブは、その前身ともいえるネーゲル・スキー同好会の上級者クラブとしてつくられました。

ネーゲル・スキー同好会は故松尾武夫前会長が家族や友人達をさそってスキーに出かけたことに始まった家族的な会で、すでに30年以上の歴史をもっています。ちなみにネーゲルとは、フランス語のネージュ（雪）と、ゲール（戦い）から作った言葉です。

当クラブは、都連加盟当時クラブ員30名、有資格者2名というこじんまりとしたクラブでした。

地域・職域団体と違い家族からスタートし、友人が友人を呼び、その友人がまたその友人を呼び集うという口コミでクラブ員が増えてきたため、年齢層も幅広く、住んでいる所も各地に散らばっており職業も様々です。その為色々な情報が集まってくるというのも良い所の一つだと思います。クラブとしては、中級者以上で大学生の年齢に達している人で、技術的向上、そして、準指導員や指導員を目指す有志でできています。

年間の活動は、11月のsawwsに始まり3月の同好会までに3回のバジジテストを含む9回に及ぶ行事予定をこなしています。現在クラブ員は117名で、その内有資格者は44名と非常に有資格者率が高くなっています。これも以前専門委員にっていた西川会長と、現役金子専門委員のたゆみない技術研究心と、それに続くクラブ員の情熱の成果だと思います。

大きなクラブになった今もアットホームな雰囲気
のネーゲルにあなたも参加しませんか。

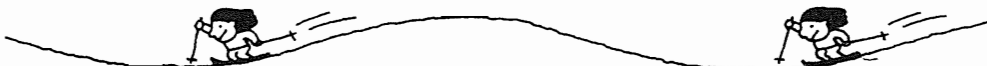
児童スキー研究会

代表委員 菊地 昭一郎

「児童スキー研究会」は、「東京ベールンスキークラブ」の紹介で昭和48年に東京都スキー連盟に加盟し一昨年加盟20年の表彰を受けたスキークラブです。私達はそもそも、子供のスキー指導の依頼を受けて集まった仲間でしたから、スキーが好きで子供が好きという者たちの集まりです。現在の会員数は100名を越えています。（都連への登録人員は30名ですが）

会の活動としては、冬休みの12月と春休みの3月に子供のためのスキー教室を開催し、正月から3月の初めまでのシーズンには、会員のための親睦会、技術研修会、バジジテスト、スキー合宿などの行事を行なっています。またシーズンオフにも総会をはじめ、いくつかの行事を企画し会員相互の親睦を深めています。私たちの主催するスキー教室に参加し、指導を受けて育った子供達の何人かが、大きくなって会員になるというのも、この会の特徴といえるでしょう。

一方「児童スキー研究会」ということで、子供のスキー指導だけでなく、子供のスキーに関する調査と研究も行なっています。ずっと以前には、初心者のスキーレッスン中における滑走時間を調べました。最近では「初心者のスキーにおける運動強度」を調べ、日本体育学会において発表しました。そして一昨年からは「初心者の転倒に関する研究」を行なっており、スキー学会において報告をしています。相手が初心者であっても、追跡調査をしそのデータを分析することは、なかなかめんどろなことです。しかしこれからも、自分たちのスキー技術を磨くとともに、子供のスキーのための指導と研究を続けて行くつもりです。



新日鉄本社スキークラブ

会長 不破 信

皆さん、こんにちは！ 新日鉄本社スキークラブです。当クラブは部員数約80名からなり、老若男女を問わず幅広い年齢層の個性派集団です。本社のみならず研究所等の部員も多いため、クラブ内の情報パイプ役として、会長、幹事長、他8名の幹事がおり、クラブの実質的な運営を行っています。具体的には、月1回本社ビル内で「幹事会」なるものを開き活動予定等を決定しています。

その活動は？といえますと、シーズンに入る前に年間のツアー予定計画を作成し、担当幹事を決めます。どのツアーにも担当幹事それぞれのカラーが反映され個性的で楽しいものも多く企画されています。各部員は事前に回覧される募集要項を見てから自由に参加しています。

スキーツアーの目玉は、毎年2月上旬から3月上旬にかけて行われるクラブあげでの「社員講習会」です。参加者を実力に応じて班分けし、各班にスキー部員1名が講師として付き、3日間熱心に指導をするため参加者全員が腕を上げてゲレンデを後にします。

その他、シーズンオフの企画としてキャンプや海水浴と行ったさまざま活動を行っています。飛び入り参加も大歓迎です。興味のある方は是非参加してみてください。

編集後記

都連が一連の出来事により混乱した中で、シーズン中の各行事を無事に終了できたのも、皆様のご理解とご協力の結果と考えております。

都連は正常な方向に向かいつつあります。これからも、スポーツマンとして誇れる団体にみんな一致団結して頑張りたいと思います。

今回デフの3人の方々が準指に合格し、その喜びと抱負を述べていただきました。都連加盟団体

立教大学アルンダー基礎スキークラブ

鈴木 明

私達、立教大学アルンダー基礎スキークラブは、その名の通り学生スキーサークルです。今年で創部から25年目を迎える訳ですが、活気は衰えるどころか以前よりも増しており、今年も多くの新入部員を迎え、総勢80人ちかくの大所帯となりました。毎年、大人数をかかえる我がクラブではありますが、誰一人として知らない人などおらず、幽霊部員ゼロのとてもまとまりのあるクラブです。

このクラブの大きな目標は、毎年岩岳で開催される学生スキー大会で優勝することです。そのために、オフシーズンから日夜厳しいトレーニングを行っています。

このように目標は大きいのですが、だからと言って皆んなが皆んなスキーの経験がある者の集まりという訳ではありません。初心者からという人がほとんどです。しかし、お互い切磋琢磨することで技術を磨き上げ、現在、1級以上の取得者が約20人、2級まで含めると部員の半数以上が級保持者となっています。

オフシーズン中はシーズンへ向けてのトレーニングが主ですが、こうした中で専修大、駒沢大、学習院大、女学館などのスキークラブと交歓トレーニングを行い、他校との交流も深めています。その他にも旅行やソフトボールをしたり、お酒を飲んだり、勉強したり？と日々の生活を送っています。

以上のように、アルンダーの紹介を書き綴ってきましたが、これだけでは語りつくせないクラブなので、機会がありましたらどうぞ声をかけて下さい。

の皆さん、どうぞ彼らや身障者の方々を暖かく見守ってください。

編集者

委員長 藤原正光

委員 本間毅一、三瓶一男、塚本哲夫、
藤雄比佐夫、蒔野秀治、川淵 誠、
海老澤晃、内田修子、入佐淳子